The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ネルヴァルにおける祝祭の観念 : <<Voyage en Orient>>=祝祭の中の旅
Author(s)	七尾, 誠
Citation	Gallia. 1981, 20, p. 11-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4506
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ネルヴァルにおける祝祭の観念
—《*Voyage en Orient*》＝祝祭の中の旅[1]—

七　尾　　誠

《*Aurélia*》は，ある意味で，作者自身その冒頭付近で暗示しているようにひとつの秘儀入信物語であると言える。主人公は，夢や狂気のもたらす幻覚等が次々と彼に与え続ける試練の数々を経た後に，彼自身の救済と彼と運命を共にするところの全宇宙の失なわれた原初の調和の再建を実現するのである。

同様の事が，一見乱雑に構成されたかに見える —— 実際，発表誌もまちまちであり，最初の雑誌発表（1840年）から定本刊行（1851年）まで10年以上もかかっている —— 大著《*Voyage en Orient*》についても言えるように思われる。《*Voyage en Orient*》(以下《V. O.》と略す）の主人公は，オリエントというヨーロッパ人共通の源泉にS'INITIERしようとして旅を続けるのである。それでは，この作品において《*Aurélia*》の夢や幻覚が果たしている試練の場としての役割を担っているものは何であるのか。それは《祝祭》である。主人公はオリエント各地を恰も祝祭の狩人の様に経巡り歩く。丁度《*Aurélia*》において夢がほぼ各章毎に登場して物語の進行の横糸を形成しているのと同じ様に，祝祭は《V. O.》全編に散りばめられていわば旅の宿駅の一つ一つを形作っている。オリエントの旅はネルヴァルにとって祝祭から祝祭への旅なのである。

1．ネルヴァルにおける祝祭の観念

本稿は，《V. O.》において祝祭がいかなる形で一つのイニシアシオンの試練の場としての役割を果たしているのかを考察し，そしてこの作品と遺作《*Aurélia*》との関係を探る事を目的としているのであるが，作品分析に入る前に，ネルヴァルにおける祝祭の観念といったものについて少し触れておきたい。

彼における祝祭の観念は二つの重要な側面を持っている。その一つは例えば次の様な部分に見られるものである。

> (…) et, comme l'homme est toujours mécontent de l'état présent, on rêvait aussi le retour de cet âge d'or vanté par les aïeux. Ainsi Virgile s'écrie, en prévoyant des jours meilleurs : ***Jam redit et Virgo, redeunt Saturnia regna!*** N'y a-t-il pas, dans nos trois derniers jours de carnaval,

une pensée toute pareille?[2]

すなわち，彼にとって祝祭とは，全宇宙的な調和に支配されていた過去の黄金時代の回帰への人々の憧れの産物なのである。そして，その《回帰》の幻想は多くの祝祭に共通する —— 特に農業及び宗教的な起原を持つ祝祭において顕著であるが —— 一つの特殊なメカニスムの働きによってより華麗かつ完璧なものとなる。特殊なメカニスム，それは一つの神的存在，一人の英雄，人格化された太陽もしくは何らかの植物の死に対する公的な悲嘆とその後に続く死せるもののより力強い姿での再生への喜びである。生は一端この地上から姿を消すが故により豊饒な姿での再生が可能となるのであり，人々はそして世界は，祝祭の場においてこの様な死→再生のメカニスムに触れる事によって自ら若返る事が可能となるのである。ネルヴァルは，イシス神信仰の祝祭（オシリスの死と再生のドラマ）を題材にとって祝祭の持つこの魔術的な力を描き出している。

Une femme divinisée, mère, épouse ou amante, baigne de ses larmes ce corps saignant et défiguré, victime d'un principe hostile qui triomphe par sa mort, mais qui sera vaincu un jour! La victime céleste est représentée par le marbre ou la cire, avec ses chaires ensanglantées, avec ses plaies vives, que les fidèles viennent toucher et baiser pieusement. Mais le troisième jour tout change : le corps a disparu, l'immortel s'est révélé ; la joie succède aux pleurs, l'espérance renaît sur la terre ; c'est la fête renouvelée de la jeunesse et du printemps.[3]

祝祭の持つもうひとつの重要な側面とは，祝祭の場においてはいかなる敵対関係，いかなる差違・差別も大いなる混沌と昂揚の中に溶け込んでしまうという事である。祝祭という日常の中に突然出現した非日常の時空の中にあっては人々は皆平等となり，様々な相異なる互いに相入れない思想さえも一つに溶け合ってしまう。この祝祭の持つ特権的な性格は，諸々の宗教・思想のいかなるものも否定する事のない一つの新たな綜合的な思想体系（サンクレチスム）を夢想するネルヴァルを魅きつけてやまない。先に引用した部分の少し前で，すなわちイシス神の祝祭に触れながらイシス神と聖処女との多大な類似点に言及しながら彼は次の様に言う。

Au contraire, aux yeux du philosophe, sinon du théologien, ne peut-il pas sembler qu'il y ait eu, dans tous les cultes intelligents, une certaine part de révélation divine? (…) Une évolution nouvelle des dogmes pourrait faire concorder sur certains points les témoignages religieux des divers

temps. Il serait si beau d'absoudre et d'arracher aux malédictions éternelles les héros et les sages de l'antiquité![4]

さて，ここで少し整理しておく。ネルヴァルにおける祝祭の観念は次の主要な二点に要約される。a）祝祭とは，人がその中において自己の又は世界の源泉に触れる事によって（彼はそこで死 → 再生のドラマを追体験する機会を得る）自己の再生に至る事を可能にする場である。b）祝祭とは，対立する事象が一つに溶け合い，そしてその内のどれもが抑圧されたり打ち棄てられたりする事無しに新たな発展を遂げる事ができる様な場である。

この様なネルヴァルに特徴的な祝祭の観念についての認識の下に祝祭の中の旅の記録である《V．O．》の分析に移る事にしょう。

2．《*Voyage en Orient*》＝祝祭の中の旅

《V．O．》の序章においてネルヴァルは，自分はオリエントに太陽を捜しに行くのだと言う。《太陽》，それは何よりも先ず彼が急激に失ないつつある肉体的活動力及び創造的精神力の象徴である。肉体は大都会のその日暮し的ジャーナリスト稼業に疲弊し，精神は数々の興行（戯曲）の失敗，うまくゆかない恋等により狂気にまで追いやられていた彼が，地平の彼方のヨーロッパ文明の源泉に光り輝く太陽に魅せられるのはごく自然な事である。そして又，この様な大旅行を終えて無事帰還し，それによってより良い仕事をものにするという事は，彼にとっては，自己の狂気と言われるものを否定し，《健康》に戻った事を人々に認めさせるという意味があったのは確かである。

(…)il importait que mon retour à la santé fût constaté bien publiquement; et rien ne devait mieux le prouver qu'un voyage pénible dans les pays chauds; ce n'a pas été l'un des moindres motifs de me le faire entreprendre à tout prix.[5]

この様にオリエントに《GUÉRISON》を求めて旅立ったネルヴァルに最も執拗につきまとう強迫観念は，精神的肉体的衰えの自覚であり，青春は過ぎ去ったという認識であり，それ故の老化そして死に対する脅えである。

Que dirons-nous de la jeunesse, ô mon ami! Nous en avons passé les plus vives ardeurs, il ne nous convient d'en parler qu'avec modestie, et cependant à peine l'avons-nous connue! à peine avons-nous compris qu'il fallait en arriver bientôt à chanter pour nous-mêmes l'ode d'Horace: ***Eheu fugaces, Posthume*** … si peu de temps après l'avoir expliquée …[6]

だが，彼にとってオリエントとは《千一夜物語》の夢がそのまま現実となっている国である。周知の様に —— そして彼自身も或る所[7]でド・メーストルの言を借りて強調している様に —— 夢の中では時間観念は混乱する，もしくは消失する。だからオリエントにおいては，夢の国の旅人ジェラールは言わば時間の枠の外にいるのである。それ故，この《人類共通の源泉》において彼は上記の様な執拗な喪失感，死からの脅迫に対する一つの《良薬》を見い出したと高らかに宣言するのである。

> Triste consolation, que de songer à ces soirs vermeils de la vie et à la nuit qui les suivra! Nous arrivons bientôt à cette heure solennelle qui n'est plus le matin, qui n'est pas le soir, et rien au monde ne peut faire qu'il en soit autrement. Quel remède y trouverais-tu? J'en vois un pour moi: c'est de continuer à vivre sur ce rivage d'Asie où le sort m'a jeté; il me semble depuis peu de mois, que j'ai remonté le cercle de mes jours; je me sens plus jeune, en effet je le suis, je n'ai que vingt ans![8]

この様な夢の国の旅人の旅の記述態度は，彼が《GUERISON》の為の《良薬》を求めているが故に必然的に特殊なものとならざるを得ない。旅の終り近く，断食月（すなわち一つの祝祭）の真只中に在るコンスタンチノープルにおいてネルヴァルは，彼のエクリチュールの特殊性を次の様に表明している。

> Je n'ai pas entrepris de peindre Constantinople; ses palais, ses mosquées, ses bains et ses rivages ont été tant de fois décrits: j'ai voulu seulement donner l'idée d'une promenade à travers ses rues et ses places à l'époque des principales fêtes.[9]

つまり，彼が都市を風景をそしてオリエントを理解するのは，もしくはそれらにS'INITIERするのは，この様に祝祭を通してなのである。別の箇所で彼は，一つの街を理解し愛する方法として，一時期そこに滞在してあらゆる点から見てその街の市民に成りきるというものを挙げているが，この祝祭を通しての方法も同じ意味を持っていると言える。

ところで，重要な点は彼が，それを通して一つの街を理解し，オリエントにS'INITIERするところの祝祭そのものに《全的に参加》する事に成功するか否かという問題である。（この《全的に参加する》という表現を我々はここでは，前述の様な祝祭の持つ魔術的な力を完全に享受しようとする強い意志から発する完璧なる自己変革を試みようとする行為という意味合いで使用する。祝祭に《全的に参加》しようとする者は，祝祭そのものの運命を自己のそれと重ね合わさねばならない。すなわち，彼は祝祭の主要性質の一つである

《死→再生》のシステムを彼自ら追体験しなければならないのである。短かく言えば，彼は祝祭そのものと自己同一化しなければならないのである。丁度作家としてのネルヴァルが常に自己の物語の主人公に自己同一化してきた様に。)《全的に参加》しなければ，その時彼は，彼が最も忌み嫌う《イギリス人観光客》と同じ単なる冷たい眼の傍観者になってしまうであろう。オリエントという魔法の源泉に完全に浸る事によって若返りを果たし，活力を取戻せるのは，この《参加》の試みが成功した後でしかないのである。彼がINITIÉSの一人になれるかどうか，それはこの《参加》の試みの成否にかかっているといえる。

さて，《V．O．》の主人公がオリエントの数々の祝祭に《参加》する為に取る《武器》（方法）は次の三つのグループに分類する事ができる。　a）万能のキー・ワード《TAYEB》，b）変装による変身の試み，c）結婚。次に我々は，彼がこれらの《武器》をいかに活用するのか，そしてそれによる《参加》の試みは成功するのか否かを少し具体的に見てゆく事にする。

ネルヴァル作品の主人公と祝祭もしくはその類似のものとの出会いには，多くの場合或る一定のパターンが認められる。彼の精神又は肉体が何らかの危機的状況にある時，それを救う（又は試練を与えてより高次な状況へと彼を導く）ものとして祝祭はたち現れるのである。例えば《V．O．》に挿入されたコント《暁の女王と精霊の王ソリマンの物語》の主人公アドニラムが彼の祖先達との再会の宴の場に導かれるのも，彼が死の危険に晒されている時であるし，大都会の虚飾の現実生活に疲れた《*Sylvie*》の主人公が輝ける幼年時代の象徴である村娘シルヴィに出会うのも祝祭の場なのである。カイロにおいて，この街全体を覆う《ヴェール》と至る所に見られる廃墟（それはすべてを老い衰えさせるネルヴァル最大の敵《時》の魔力の証しである）がもたらす不吉な印象に沈みこむ《V．O．》の主人公が出会うのは，洪水にも以た光と音に伴われた結婚の行列 —— 一つの祝祭 —— である。その祝祭に参加する事を当初は躊躇する彼を勇気づけるのが万能のキー・ワード《TAYEB》なのだ。それは彼の地の《言語の礎》であり，《人がそれに付与する抑揚によっていかなる事象をも意味する》事ができる単語なのである。この《TAYEB》の魔力のおかげで彼はこの祝祭の光と音の洪水を充分に享受する事に成功するのであるが，《家家の内奥》（そこにこそこの祝祭の最も輝かしい部分があるのだが）に踏み入る事に気後れを感じ，《参加》の試みは半ば成功しただけに終ってしまう。だが，彼はこの祝祭がすぐれて秘儀入信的な性格を有している事に気付いている。ヴェールの下に隠された花嫁の《知られざる美》を唯一人自己のものにできる花婿の有頂点は，丁度《ピラミッド》と題された《V．O．》中の一章に描かれている幾多の試練の果てに《ヴェールの下に隠されたイシス女神》の神々しい顔をかいま見る事を許される新参の入信者の喜びと等価なのである。《TAYEB》という万能のキー・ワードは主人公の憶病さの故に或る程度までしか効力を発揮せず，後には奴隷女ゼイナブとの関係において逆に彼の足に鎖を課すに至る働きをするのであるが，この様に祝祭の秘儀入信的な性格を彼に気付かせるという作用は果

たしているのである。

さて，《TAYEB》の魔力の助けを得ても祝祭に《全的に参加》できない主人公が次に取る《武器》は《変装による自己変革の試み》である。この《武器》は《 V. O.》においては二度使用されるのであるが，ここでは二度目の試みについて検討する。彼は断食月の中にあるコンスタンチノープルの夜毎の祝祭に参加しようと望む。この断食月の間，日常の生は逆転される。すなわち昼は夜（つまり断食と蟄居），夜は昼（街頭での祝祭）なのである。そしてこの月が終ると新年がやって来る。という事は，人々の生は，暦の月日と同様に一旦仮の死を迎え，その後その仮の死が苛酷であればある程より生々とした再生を迎えるのである。この様にこの東方の祝祭には，前述した祝祭固有の《死→再生》というメカニスムが大変顕著に認められるのである。

当初，この回教の祝祭に主人公が参加する事は全く不可能に見える。参加の為の唯一の方策は，コンスタンチノープルの回教徒居住区スタンブールに住みつく事であるが，キリスト教徒には許される事ではない。ここで彼の脳裏をかすめるのはカイロでの変装による祝祭への参加の或る程度までの成功の思い出である。だが，以前よりも更に完璧な変装もしくは変身が要求される。つまり，外的にキリスト教徒的風貌を捨てるのみならず，《北の言葉》（フランス語等）を喋る事をも放棄せねばならないのであり，言わば彼は内的にも一時的に国籍をも捨て去らねばならないのである。この様な《参加》への準備が人々の助けも借りて整えられ，彼がこの禁欲とその解放という二重の祝祭と自分自身とを同一化しさえすればよい状態になり，夜毎の祝祭が彼の眼前に展開するにもかかわらず，又しても彼は《全的な参加》に失敗する。そして，その原因は常に彼の内部に在る。すなわち，彼は祝祭の《死→再生》というメカニスムに自己同一化せねばならないのに，回教徒たちが仮の死に蟄居している昼間に，《言葉を取り戻しに》（つまり捨てたはずの国籍を取り戻しに），ヨーロッパ人居住区ペラを訪れる事をやめないのである。

> N'étant pas forcé, comme les musulmans, de dormir tout le jour et de passer la nuit entière dans les plaisirs pendant le bienheureux mois du Ramazan, à la fois carême et carnaval, j'allais souvent à Péra pour reprendre langue avec les Européens.[10]

《変身》は完璧であっても，この様に《自己変革》は成されておらず，《参加》は《全的》ではあり得ない。それ故，彼は結局，冷たい眼の傍観者に他ならず，次の様に《既に見た物》に興味はないと，観光客でしかない自己を露呈してしまうのである。

> La représentation donnée par les derviches hurleurs ne m'offrit rien de nouveau, attendu que j'en avais déjà vu de pareilles au Caire.[11]

そして，この様に《断食月の三十日の夜を見た事に満足》（傍点筆者）する彼にとっては，コンスタンチノープルとは《楽屋を訪れたりせずに客席から眺めていなければならない舞台の書割り》にすぎないのである。《書割り》の中に展開する祝祭は所詮絵空事でしかなく，《全的な参加》など望むべくもないのであり，我々はここで彼の第二の《武器》も不完全にしか機能しなかった事を確認する事になる。

さて，残された最後の《武器》，それはオリエントにおける現地人の女性との結婚によるこの地への同化の試みである。《 V. O.》の話者は，既に引用した様に《もはや朝でもなく夜でもない人生の時》に対処する為の《良薬》をこの地に見出したと言うのであるが，彼にとっては，この《良薬》を最も効果的に使用する為には《結婚》が必要なのである。

> Il faut que je m'unisse à quelque fille ingénue de ce sol sacré qui est notre première patrie à tous, que je me retrempe à ces sources vivifiantes de l'humanité, d'où ont découlé la poésie et les croyances de nos pères![12]

主人公が出会う《無邪気な少女》とは，ドルーズの民の族長の娘サレマなのだが，彼は彼女との出会いの最初から彼女に対する感情を《AMOUR》という名で呼び，そしてその感情を故意に女優や女王や女神に対する愛と混同して語るのである。これはネルヴァル固有の《現実を劇場として見よう》もしくは《自己の人生を一編の小説として生きよう》とする傾向から発しているのであるが，この様な傾向に支配される彼が，自己と彼女（彼は彼女の出現を《夢の実現》とまで言う）との結婚が運命によって既に決定されているものであると考えるのは必然的であるとさえ言える。何故なら，人生が小説であり，現実が劇場であるなら，この世の有為転変は既に《書かれた》ものであるはずだから。

> Rien n'ajoute de force à un amour commençant comme ces circonstances inattendues qui, si peu importantes qu'elles soient, semblent indiquer l'action de la destinée. Fatalité ou providence, il semble que l'on voie paraître sous la trame uniforme de la vie certaine ligne à suivre sous peine de s'égarer. Aussitôt je m'imagine qu'il était écrit de tout temps que je devais me marier en Syrie; que le sort avait tellement prévu ce fait immense, qu'il n'avait fallu rien moins pour l'accomplir que mille circonstances enchaînées bizarrement dans mon existence, et dont, sans doute, je m'exagérais les rapports.[13]

そして，ドルーズの民の信仰する教えの秘儀人信的性格の強さの故に，族長の娘への愛

は，理想の女性へのイニシアシオン（《夢の実現》である彼女との結婚とは，とりも直さず大いなる祝祭への《全的な参加》の成就に他ならない）であると同時に，ドルーズ教という極めてサンクレチックな（それ故にネルヴァルの理想の宗教思想の一つである）宗教へのイニシアシオンでもあり，言わば《二重の》イニシアシオンとしての意味を持っているのである。この様な《二重の》イニシアシオンの試練（彼によれば，それは彼女の花婿となるに相応しくなる為の《ETUDE》である）を着々と通過してゆく主人公は，遂に祝祭への《全的な参加》の為の鍵を手中にしたかに思われ，《V. O.》もロマネスクなハッピーエンドに飾られるかに思われる（後にも言うが，そうであれば《*Aurélia*》なる書物は遂に書かれなかったかも知れない）。だが，事態は思いがけない不運の介入によって唐突な変化を迎える。不運とは主人公を襲うこの土地特有の熱病であり，死から逃れる為には，彼はこの結婚という名の大いなる祝祭の燃えたぎる中心である国から，出来るだけ速く遠く離れなければならず，再発しない為には二度と戻ってはならないというのである。ここに来て，叙述は急流の様な調子となり，主人公は風の素早さでシリアからベイルート，スミルナ，コンスタンチノープルへと移動する。この一種投げやりなまでの空間的推移は，《*Sylvie*》第13章《オーレリー》の叙述における急激な時間的推移と酷似している（これ程急激な推移 —— 時間的にしろ空間的にしろ —— はネルヴァルにおいては甚だ珍しい事であると言える）。この酷似現象の意味については，ここでは詳述しないが私見では，ネルヴァルの内部におけるロマネスクな傾向とレアリスチックな傾向とのせめぎ合いの結果ではないかと思われる。ともあれ，祝祭という名の宝庫の最後の扉に手を触れた途端に退却を余儀なくされた主人公は，この不条理で神秘的とも言える失敗の中に何らかの運命的なものの介入を想定せずにはいられない。

> Il était sans doute établi de toute éternité que je ne pourrais me marier ni en Egypte, ni en Syrie, pays où les unions sont pourtant d'une facilité qui touche à l'absurde.[14]

そして，このエピソードの末尾を飾るのは，一人の友人の死の知らせであり，《墓地》《葬列》《幽霊》などの不吉な単語群である。エジプトについて彼が愛惜するものについて，彼は次の様に言うが，この一文程見事にネルヴァル的思考の特徴を表わしているものはない。

> C'est un ami, c'est une femme,——l'un séparé de moi seulement par la tombe, l'autre à jamais perdue.[15]

つまり，死は愛する者から彼を《単に引き離すだけ》であるが，自己の過失 —— この

場合の様にそれがいかに不可抗力のものであっても —— から失なわれた愛する女は，彼にとって《永遠に》失なわれてしまうのである。丁度，二度も入信の試練に失敗したオルペウスが永遠にエウリュディケーを失なってしまう様に。こうして《 V. O.》の主人公は，祝祭への《全的参加》の為の最も好都合な機会をほとんど掌中にしながら失なってしまうのである。

この様に，オリエントの祝祭に参加する為に彼が取った《武器》は悉く効力を発揮できなかった。それ故，彼のこの地へのアデューは，夢の国から追放された不幸な《覚醒者》の悲しみに満ちている。

> Triste impression! je regagne le pays du froid et des orages, et déjà l'Orient n'est plus pour moi qu'un de ces rêves du matin auxquels viennent bientôt succéder les ennuis du jour.[16]

もし彼がこのオリエントという名の《源泉》の祝祭に《全的参加》し得ていたなら，夢は彼を追放しなかったであろうし，彼は一つの終る事のない祝祭を永遠に享受する事ができたであろう。

さて，以上の様に我々は，東方におけるネルヴァルの足跡を簡単に辿ってきたわけであるが，ここに彼が東方旅行から引きだした一つの教訓の様なものが明らかになってきたと思われる。要約してみよう。つまり，オリエントに代表される様な《源泉》が人に対して行使する若返らせる魔力は常に有効である。しかし，人がそれを効果的に利用し，完全に若返る為には，彼は次の条件を満足させなければならない。すなわち，彼は自己の人格の完全な変革の為のイニシアシオンの試練の数々に耐えねばならず，その場合，彼は安易な変装や皮相な変身に軽薄に満足してはならず，その試練を前にして少しも躊躇ってはならないのである。そして，我々には《暁の女王と精霊の王ソリマンの物語》に描かれたアドニラムの冒険のエピソードと断食月から新年への移行のエピソードの中に，この点についての大変意味深い示唆が潜んでいる様に思える。アドニラムは，地下世界への下降を経た後に，すなわち仮の死を経た後に INITIÉ 達の列に加えられるのであり，断食月の中では，人々は，新年の訪れを死に等しい厳しい禁欲の生に耐えながら幸福な希望を胸に待ち望んでいるのである。そう，再生の為には死の体験は不可欠なのである。

その上，旅行における《参加》の試みの無数の失敗 —— 特に族長の娘サレマとの結婚の不条理な失敗 —— は，現実のプランの上では，彼が祝祭に《参加》しようと目論む事が最早不可能である事を示している様に思われる。

3．《*Voyage en Orient*》と《*Aurélia*》との関係

では，これらすべての事が明らかとなった今，どうすればよいのであろうか。その事に思いを馳せる時，我々には有名な《*Aurélia*》の冒頭の一節の響きが聞えてくる様に思わ

れる。

> Le Rêve est une seconde vie. (…) Les premiers instants du sommeil sont l'image de la mort; un engourdissement nébuleux saisit notre pensée, et nous ne pouvons déterminer l'instant précis où le *moi,* sous une autre forme, continue l'œuvre de l'existence.[17]

この様に，夢は人に一時的な仮の死と新しい生とを与えるのである。今後，《全的な参加》の，彼自身と宇宙全体との《GUERISON》の機会を求めるのは，現実のプランの上ではなく，夢の領域の中にであろう。それに，既に《V. O.》において，このレアリスムに支配されているが如き作品の中において，話者は彼の夢への信仰を次の様に表明していたのである。

> Il est certain que le sommeil est une autre vie dont il faut tenir compte.[18]

BIBLIOGRAPHIE

引用のテクストは，Pléiade 版（第一巻：五版1974年，第二巻：三版1970年）を使用した。Notes においては，一巻・二巻をそれぞれⅠ・Ⅱと表記した。

NOTES

(1) 本稿は，筆者の修士論文《*L'Idée de fête chez Nerval*》の前半部分の要約である。

(2) 《*Le Bœuf gras*》，Ⅱ，p. 1253

(3) 《*Isis*》，Ⅰ，p. 303

(4) Ibid. p. 302

(5) コンスタンチノープル発の1843年10月5日頃の父への書簡。I.，p. 947

(6) 《V. O.》，Ⅱ，p. 335

(7) 《*Jacques Cazotte*》の異文，Ⅱ，p. 1535

(8) 《V. O.》，Ⅱ，p. 336

(9) *Ibid.* p. 622

(10) *Ibid.* p. 472

(11) *Ibid.* p. 501

(12) *Ibid.* p. 338

(13) *Ibid.* p. 350

(14) *Ibid.* p. 432

(15) *Ibid.* p. 434

(16) *Ibid.* p. 624

(17) 《*Aurélia*》, I. p. 359

(18) 《V. O.》, II, p. 104